

ネイチャー高知

No 49 2017年7月27日発行

自然調べ 2017 は「ウナギ目線で川・海しらべ！」

日本自然保護協会の自然調べ 2017 は「ウナギ目線で川・海しらべ！」です。

ニホンウナギがいま、大きく数を減らしています。ウナギがなぜ減っていったのか、今年の自然しらべでは、過去 4 回実施した「川しらべ」のデータも活用しながら、主な生息場所である川や干潟をしらべることで、その原因をさぐっていきます。

スウェーデンで 2010 年に行われた研究では、1 つの障害物に対してどれくらいウナギが越えられたかを調べました。結果は 1 つの堰などの障害物があると遡上成功率は 30% でした。そのため 1 つの河川に堰が 3~5 か所もあると、ウナギが遡上できる確率はとんでも低くなります。また、国内の研究では堰の高さが 40 センチを超えると、うなぎの遡上が難しくなることも分かっています。堰があることでウナギの遡上や生育に大きな影響を与えています。そんな現状を全国各地でしらべます。

ニホンウナギ (*Anguilla japonica*) は、マリアナ諸島近くの海で産卵し、日本や東アジアの川や沿岸で成長する生きもの（専門用語で降河回遊魚）です。環境省レッドリスト 2017 では絶滅危惧 IB 類 (EN)、国際自然保護連合 (IUCN) のレッドリスト*でも絶滅危惧 IB 類 (EN) に区分されています。

ウナギの減少には、過剰な漁獲、河川や沿岸域等の成育場の環境変化等、複数の要因が関わっていると考えられています。

ウナギの生息のためには、川や河口、沿岸域の自然の連続性が確保されることが重要です。自然しらべ 2017 では、そんな環境がどれだけ残されているか、川と干潟でしらべます。ご協力をお願いします。



自然調べ 2017 の参加マニュアルは次の場所にあります。

<http://www.nacsj.or.jp/project/ss2017/pdf/manual.pdf>

わたしのフィールドノート ミクリの仲間たち

田城 光子

久しぶりに江の村の湿地を訪れた。早春に野焼きが行われ、すっかり黒くなっていたあたりは今では一面緑の波がうねっている。「ジャンボタニシが増えて、稲の根元が切られるのでもう米づくりはできん」と稲作を止めた人もいるが、残った田んぼにはサギの仲間が集まり、餌をついばんでいる。その中を、コンクリート張りではない昔ながらの小川がさらさらと心地よい音を奏でながら流れている。岸には白い花をつけたセリが生え、ミズハコベは鮮やかな緑で、エビモは水底近くで思いっきり体を伸ばして流れに身を任せている。少し歩くとナ

ガエミクリが見えてきた。水に浮いているもの(浮葉)や水面より上に立ち上がったもの(抽水葉)もある。小川一面を覆っている箇所もあり、花もちらほら咲き始めていた。その中に点々ではあるが葉が黄色く枯れかかったものがある。周囲の休耕田に除草剤が使用され、一部がナ



流水中のナガエミクリ(沈水形)

ガエミクリにもかかったのだろう。このあたりは貴重な植物が数多く生育している。常用されるとたいへんなことになる、と暗い気持ちになった。

ナガエミクリは、このようなきれいな流れにのみ生育するものと思っていたら、三原村のもう使用されていない暗く小さな農業用ため池でも、よく似たものを見た。ミクリの仲間は見分け方が難しい。花には雄花と雌花があり、それぞれの花は球状に集まって頭花となる。頭花の数、花序の柄の有無、柄は主軸に合着するか、しないか、花序は枝別れするかしないか、果実の形や大きさ、などが同定のポイントとされるそう。同じ集団の中でも変異があるそうで、一筋縄ではいかないのがミクリ属のようである。そのため、同定は素人判断のほなはだ怪しいものだが、①花序は枝をわけていない ②頭花に柄があり主軸には合着していない(腋性)ことなどから、ナガエミクリと考えた。

柄が主軸に合着する(腋上性)特徴を持つヤマトミクリは、このナガエミクリがある池から約1 km離れた、やはり同じような環境に生えている。ここはわたしの実家の古い先祖の墓があるところで、毎年12月には一族が墓前に集まり先祖祭祀をする。祭りは先祖の名前から「右衛門さん」と呼ばれ、嬉しいことがあれば報告に、辛いことがあれば力を貸してほしいとお願いにくる場所であった。子供のころからよく訪れた場所であるが、墓のすぐ下に小さな池があり、いつもいっぱいの水をたたえていて、水草らしいものが生えていた記憶はない。高知県植物誌の調査が始ま



花期のナガエミクリ（抽水葉と花序）

ったころには水はなくなり、周囲から入り込んだ土砂が堆積して一面ヤマトミクリが生えていた。最近になって上の神社へ車であがれるようにと道がつけられ、ヤマトミクリの上には伐採した木が倒されたままになっていたり、周囲の環境が急速に悪化していることに危機感を持った。近くの星ヶ丘公園で三原の植物の保護につとめている矢野氏にお願いし、ヤマトミクリも公園に一部移植、増やしてもらうことにした。何年かたって元気に育っているヤマトミクリ（のはずだった、、、、）をよく観ると、なんと、花序の枝を複数わけ、ヤマトミクリに比べてはるかに大きな植物体となり、どう見てもミクリでしかないものに変身していたのである。矢野氏に聞いてみたが「右衛門さんのヤマトミクリしか植えていない」という返事だった。「日当たりのよい、いい環境で育てれば、形態がかわるのかもしれない」などという人もでてきて、わたしは非常に混乱している。ヤマトミクリの生育場所付近では、ヒメミクリも採集されたというデータがあるが、わたしはまだ出会っていない。

幡多には、このほかにミクリ、オオミクリの生育も確認しているが、埋め立てられて絶滅したところがあるし、河川改修などで安心できないところもある。「右衛門さんのヤマトミクリ」は、なんとしてでもご先祖様ともどもしっかりと守っていかなければ、と思っている。

スミレに恋して その6 カナダ・バンクーバー周辺のスミレ

細川 公子

土佐植物研究会の会員より、「特別例会で是非海外へ」との強い要望に応じて、大凡 1 年前から安全・安心のバンクーバー」を段取りしてきました。バンクーバーにはアルパインツアーの講師でご自身もツアー会社を経営している川端雅章さんが在住していますので、心強いサポート体制がありました。川端さんとは 1992 年に同じく研究会でカナダに行った時からのご縁で、度々バンクーバーを訪れた際にも個人的にお世話になっており、私にとっては今回で 12 回目のカナダでした。今年 6 月 14 日から 21 日の日程でカナダ特別例会が実現しました。

ルートは高知空港—伊丹空港（リムジンバス）関西国際空港（エアカナダ航空）バンクーバーへ。観察地としては 14 日到着後に UBC 大学植物園、15、16 日にウィスラー周辺、17、18 日はマニングパーク州立公園、19 日はスタンレーパークとグランビルアイランドの市場や市内観光、20 日最終日の半日ではリッチモンドネイチャーパークなど出発ぎりぎりまで植物や鳥見を観察できました。天気は出発前の情報では毎日雨マーク！どうなることやら・・・と心配していましたが、18 日に弱い雨が降っただけでまあまあ恵まれて良かったです。（晴れ女のパワー発揮？）



Coral root

さて、カナダ 2 日目のウィスラーでの観察会は少雨の中、ウィスラーマウンテンの山麓のトレイルを歩く。針葉樹の林床では紫色～白色の Coralroot（腐生ランの仲間）が群生する。明るい場所には Salmonberry や Thimbleberry など野イチゴの花が咲き誇り、ユリやシオガマの仲間、Queen's cup（ツバメオモトの仲間）、Indian Paintbrush、イチヤクソウ、ウメガサソウの仲間など沢山の花に出会う。ウィスラーでのガイドをお願いした柳沢さんはこのトレイルを 7 時間かけて歩いたのは新記録（今まではせいぜい 3 時間程度だったそう）。お目当てのスミレ（Stream violet）はすっかり実になっていました。



Early blue violet

スミレの花の花に出会ったのはマニングパークのビーバーポンドのトレイルでした。同行の佐々木さんと下村さんが「細川さ〜ん！スミレが咲いちゅう！！」濃青紫色の Early blue violet (V.adunca) のようです。夢中で撮影していました。さらに、ここでは野鳥図鑑の表紙カバーになっている美しいニシフウキンチョウも観察できてとてもラッキーでした。



その日の宿泊ホテルの敷地内にはコロンビアジリスが沢山の穴から顔を出しては走り回り、出した手に近寄ってきます。その愛らしいしぐさには皆大喜びですっかり虜になっていまし



た。ジリスの他にハイイロホシガラスやステラーカケス、カナダカケスがごく間近に観られ、改めて人間と動物の距離の短さを実感しました。マニングパークは広い車道を車で通り抜けるにも1時間以上かかる広大な州立公園です。公園エリア内の宿泊施設はたった一

つだけ、なかなか予約の取れない宿のようですが、川端さんがいち早く手配して全額立て替え払いをしてくださったお蔭で快適に宿泊することができました。ストロベリーフラッツのトレイルでは黄色のスミレが沢山咲いていました。背丈が低く、花はタカネスミレ系の Trailing yellow violet とウィスラーではすでに実になっていた Stream violet, それに、ビーバーポンドと同じ Early blue violet があちこちに群れていました。可愛いキノコとの



Fairyslipper(ホテイソ)

ツーショットにハマってしまいました。ちなみにカナダのスミレの花の色は黄色のものが多く、紫系や白は少なく、カナダ西海岸部の図鑑 PLANTS OF COASTAL BRITISH COLUMBIA では種レベルでは8種のみ、顧みて日本はスミレの宝庫ということに驚き、身近に多種類のスミレを観察できる環境がとても嬉しく思います。針葉樹下には日本では分布の限られるホテイランやフタバランなど

ンの仲間がそこそこに観られ、メンバーからの呼ぶ声があちこちから響いて、なかなか前に進めない嬉しい悲鳴状態が一日中続いていました。次の日にはマニングパークの亜高山帯へ、ルピナス、デージーの仲間、ゴマノハグサ科のピンク、ツツジ科の小低木、ハナシノブの仲間、ペイントブラシ、シバザクラ（野生種）の花などなど百花繚乱でした。中でも、メインの黄色いカタクリ（Yellow glacier lily）とアネモネが雪解けの山肌に群生していたのは、本当に圧巻でした。アメリカナキウサギやカンジキウサギ、アメリカクロクマ（体色は茶）、リスの数種、アオリチョウなど数々の動物たちをここでも間近に観察することができました。

参加者のみなさんは殆ど全員、実際に来るまではカナダに関して「極寒の遠い国」が、川端さんから歴史や日本人との関わりについて丁寧な紹介もあって、「意外に温暖、外国に居るような気がしない」など認識を新たにしましたようです。私としては何よりも、リラックスして花旅を楽しみ、元気で全員無事に帰国できたのがすごく良かった・・・と思います。ただ、日照時間が16時間、目いっぱい活動に加えて復路の昼時間の長さから、相当の「時差ぼけ」に悩まされたようです。



Western anemone



Yellow glacier lily

野山での拾いもの コオニヤンマの羽化殻(うかかく)

坂本 彰

2011年から2014年にかけて「鏡川自然塾」の活動が展開された。鏡川自然塾というのは、大学や研究機関の専門家と市民が協働して鏡川流域の自然の現状を明らかにしようという取り組みで、植物、昆虫、ほ乳類、鳥類、両生類・爬虫類、貝類といった分類群を対象に



した講座のほか、干潟の生き物といった横断的な講座も開設された。そうした講座の一つに水生昆虫の講座があり、塾生として参加した。講座は座学に加え鏡川の本流や支流で実習があり、高知市久礼野の重倉川の岸で拾ったのがこのトンボの羽化殻である。講師から「コオニヤンマの羽化殻」と教えていただいた。決め手は触覚が丸い団扇型であることのように聞いたがうろ覚えで、確かではない。たも網で採集したヤゴのうち必要なものは標本にし、そのほかのものは放流したが、この抜け殻は私的に持ち帰っても良いとのことで記念に

いただいた。

水生昆虫の多くは幼虫の時期を水中で生活し、成虫になると陸上生活に移行する。と同時に大きく変身する。このコオニヤンマの幼虫時代の格好は、短足に加えてぼてっとしたお腹で、どう見ても恰好が良くない。それが羽化して成虫になると、幼虫の姿とは全く異なったトンボの王者のようになり格好になる。年を重ねるごとに、一つまた一つとベルトの穴の位置が広がっていくわが身と比べると、何ともうらやましい変身である。



※ コオニヤンマの成虫の写真は、下記の画像を利用させていただきました。

<http://www.hokusetu-ikimono.com/iki-h/tonbo-no-nakama/kooniyanma/index.htm>

